中野区立歴史民俗資料館だより

しいのき

第21号

桜花と日本人

名誉館長　三　隅　治　雄

古代日本人にとって、「花」と言えばまず桜のことでした。ハナは、「先端っから」などの語と関係がある先き触れの意味をもつことばで、「兆」と同じです。その兆がなぜ桜に当てられたのかと言うと、桜が稲の稔りのシンボルと考えられたからです。サは穀霊のことで、クラは座、つまり穀霊のやどりが桜花で、この花が満開になって、長い期間咲きつづけてくれると、今秋の稲は豊作と占い、逆に、満開にならないうちに風雨にうたれて早々に散ってしまうと、今年の米は凶作だと予測したのです。日本人が現代に至るまで、他の花樹よりも桜の開花に注目し続けたのもそのためで、そして「花見」の習俗の生まれたのも、桜を稲霊のやどり木とあがめて、それに酒肴を献じて、豊穣を祈念するという心からのものでした。おおぜいで桜樹の下に集まって重箱の御馳走をたべ、酒を汲み交わすのも、稔りを授けてくださる花樹の霊と交歓する、いわば祭りの宴であり、自然に感謝し、植物との共生をつねに願う民俗の美しい継承と言えましょう。

文化財よもやま話

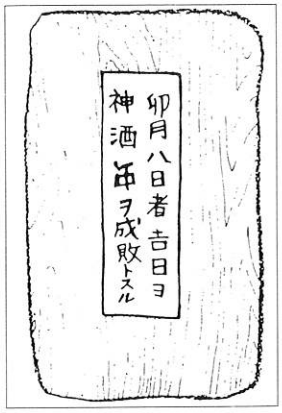
卯月八日

卯月八日は4月8日を中心とした年中行事のことをいい、これは広く各地で行われています。まず4月8日と聞いてすぐに思い出されるのは、寺院で行われる灌仏会ではないでしょうか。

この日はお釈迦さまが世に生まれた日とされており、その誕生を祝し法会が営まれます。これを灌仏会といったり、また「花まつり」といって、多くに親しまれているようです。中野区の新井薬師では本堂前で釈迦像に甘茶を献じ、またその甘茶を求める人々で賑わいます。甘茶はアジサイによく似たアマチャの葉から作られる甘味のある飲料で、これを持ち帰って子どもの手習に使用したという話も聞かれます。

また甘茶を使ったまじないが各地で広く行われていました。これは虫よけのまじないで、中野区の上鷺では短冊に「千早ぶる卯月八日は吉日よ、神の刀で上下毌を成敗する」と書き、便所や家の入口、納屋の入口といった虫のわく所に貼ったといいます。このまじないを書く時に、甘茶で墨をすることが行われていたのでした。

仏教行事として説明されることの多い卯月八日ですが、虫よけのまじないにも見られるように、仏教的な説明では解釈できないさまざまな行事が民間では豊かに執り行われていました。地方によっては4月8日を「神の日」と称して田に入ることを禁じたり、また山の神をまつる所も多くあります。元来、農事と深く結び付いた神のまつり日であったと考えることが出来るでしょう。

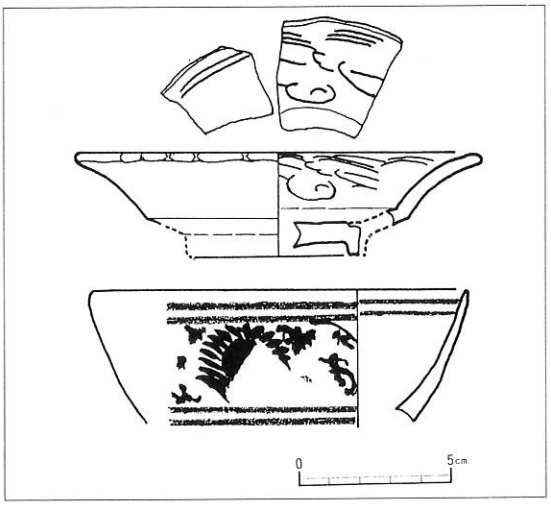


◀『ふるさと中野の民俗と行事』より

大地に眠る歴史

輸入品は宝物

中世わが国では、中国との貿易によって、青磁（全体が淡・深緑色の磁器）や染付（呉須で文様を描いた伊万里焼きの源流）といった当時日本では作れなかった磁器を輸入していました。これを持つことは、公家・武士をはじめ地方の有力者にとっても、教養や文化的高さを示すことと考えられていました。絵巻物にも床の間に青磁が飾ってある風景がいくつか描かれており、珍重されていたことがわかります。



▲上：明代の青磁皿　下：明代の染付碗

中野区でも、江古田一丁目の御嶽遺跡から16世紀代の明時代の青磁、染付の碗や皿などが発見されており、かなりの文化レベルを持った有力者の存在が予想されています。

このような貴重品がいったいどこからきたのでしょうか。当時の中野区は後北条氏の支配下に属しており、御嶽遺跡からはその本拠地小田原の土器も出土していることから、この遺跡の主は小田原、引いては後北条氏となんらかのかかわりのある人物と考えられます。

従来、中世の中野区の中心は現在の谷戸小学校から宝仙寺にかけての地域と考えられていましたが、これらの磁器の出土によって、江古田地域にも中心の一つがあったことが明らかにされたことは区の歴史の中でも重要な発見といえましょう。

特集

あの８月から半世紀

―戦中・戦後の中野―

今年の８月15日の終戦記念日をもって、太平洋戦争終結50周年を迎えます。わが国が世界にも類を見ない平和国家として再スタートをして、すでに半世紀が経過したことになります。

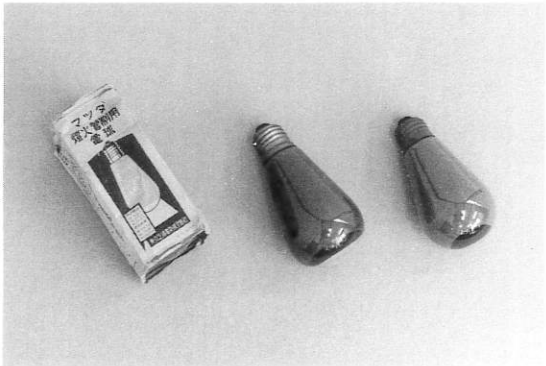
しかし、世界ではいまだに戦争がつづいています。この半世紀の平和のため、私たちにとって戦争は、歴史上の出来事でしかなくなりつつあります。二度とあってはならないことを忘れてはいけません。今あらためて恒久の平和を願うために、少ない紙面ではありますが、中野のその頃の様子と戦後の発展について特集しました。

人々のくらし

▲焼夷弾

太平洋戦争末期になると、米軍は直接日本本土を空襲するようになりました。木造家屋を主体とした日本空襲用に開発されたのが焼夷弾です。

写真の焼夷弾は中野一丁目の遺跡調査の際に発見されたもので、長さ50㎝、太さ８㎝の六角形の筒状をしています。中には樹脂状の薬品が入り落下した衝撃で火がつき吹き出すといった構造をもっています。中野一丁目では1200㎡中に４本の焼夷弾が発見されてますが、その密度からいってもすさまじい空襲があったことがわかります。



▲燈火管制用電球

戦争が激しくなると米軍の本土空襲が開始され、警報の発令と同時に燈火管制が行われました。これは、生活に最低限必要な燈火以外はすべて消灯するといったもので、上空から光が発見されないようにする目的で行われました。屋内の燈火も黒布で電球をおおい最低限の光だけで、すごさなければならなくなったのです。写真の電球はそのためつくられたものです。先の部分だけが透明で、あとは黒く塗りつぶされ、光が下方のごく一部分しか照らせないように工夫されたものでした。

▲国民服

長期化した戦争のため、膨大な量の軍服が消費されるようになり繊維資源が欠乏してきました。

そのため、資源を軍部と一般国民と共有することが考えられ、陸軍省が中心になって男子国民服が制定されました。これによって男性は政府関係者や特別な場合を除いてスーツ(背広)にかわって国民服を着用しなければならなくなったのです。女性の場合はこういったきまりはありませんでしたが、華美な洋装や勤労に適さない服装は事実上禁止され、モンペ・割烹着姿が一般的になりました。

▲衣料切符

戦時中の物資の欠乏は、軍関係優先ということもあって、日常生活のほとんどの必需品におよびました。そのため、米・塩・砂糖・小麦粉・食用油・味噌・醤油・乳製品・マッチなどは政府からの決まった量の配給になり、衣服は写真にあるように何点で何円換算といった衣料切符によって支給されるようになりました。この制度では生きていくことができず、人々は、農家へ直接行って物々交換で食料を得るといった窮乏生活におちいっていきました。

▲千人針

戦争によって、働くことのできる健康男子の大半は戦場にかり出されていきました。残された家族はただひたすらに無事を願うばかりでした。

千人針は白布に千人の女性の手によって赤糸の縫玉を一つずつ作り、戦地に出た親族におくったものです。これは、虎が千里走り千里もどるという言い伝えから生まれたもので、兵士の無事帰還を願うものでした。そのため虎が描かれています。

当時、街頭にでて、道行く人に一針ずつお願いする女性の姿がよく見られました。

▲土製羽釜

金属資源をもたない日本は、戦争の当初からその不足が切実でした。軍部はそれをおぎなうため国民から金属の供出を強要しました。そのため鍋・釜などの日用品をはじめ寺院の梵鐘までもが供出され、武器製造の原料とされていきました。

こうして人々のまわりから金属が姿を消していったのです。

写真の土製羽釜は、供出された金属製釜の代用品として造られた素焼きのものです。

その頃少年達は

中野本郷小学校50周年記念誌より

▲学童疎開

この写真は、長野県諏訪郡本郷村の高栄寺に再疎開した本郷国民学校児童の写真です。最初は上諏訪温泉の旅館でしたが、敵機の爆音は日増しに増え、更に奥地に再疎開をしました。

中野区の学童疎開は、３年生から６年生を対象に、昭和19年８月から20年11月まで実施され、約5000人の児童が参加しました。中央線から北の10校が福島県、南の10校が長野県に疎開し、別に、区内から希望者を募り山梨県塩山市の恵林寺にも疎開学園を開いていました。

桃園小学校百周年記念誌〝桃園賛〟より

▲給食

この写真は、昭和22年１月から始まったララ物資（アジア救援物資機構）による桃園第二小学校の給食風景です。当時は、１週間に２回ほどの弁当持参の副食給食でした。熱量は150キロカロリー程度であり、食器は各自家から布袋に入れて持ってきていました。

その後、昭和24年から脱脂粉乳のミルク給食が始まり、昭和25年９月からは、コッペパンを主食とする学校給食が始まりました。週５日の完全給食が実施されたのは昭和26年頃からです。

中野昭和小学校40周年記念誌より

▲話し合い活動

この写真は、昭和34年の中野昭和小学校５年生の学級会の様子です。『二人すわりの木の机とイス、話し合いが上手にできるようになりました』と、コメントがついています。

戦後の授業では、一斉指導に代わり、『ごっこ学習』や『グループ学習』が盛んになりました。中でも『討議法』は民主的な態度の育成に欠くことのできないものとして重視されました。

自己主張をする子が増えましたが、一方では、自由と責任の関係をどう教えるか。問題となりました。

〝中野区の30年〟より

▲祭りの復活

この写真は、昭和21年９月15日の宮園通３丁目（今の中野２丁目）が復活させたお祭り風景です。お祭りの復活は、戦後の暗い世相の中にあって、明るい話題となったことでしょう。子供達のための復活でもありました。子ども神輿が町内をねりあるき、太鼓の音が焼け跡に響きわたり、秋空にすいこまれていった様子が思われます。

この頃、12万人ともいわれた戦災孤児が社会問題となり、ラジオでは、連続放送劇『鐘の鳴る丘』が始まりました。

向上する生活

▲団地の登場

戦後の復興により、東京へ人口が集中しはじめたことから、住宅不足が切実な問題となってきました。そこで少ない面積で多くの所帯が居住できる鉄筋コンクリートの団地が出現したのです。写真は昭和37年頃の都営鷺宮アパートです。

木造住宅が主体だった当時、鉄筋コンクリートの団地はモダンで最先端、高度経済成長の象徴でもありました。

▲電気製品の普及

戦前の水力発電に加えて、戦後は効率のよい火力発電所が建造されることにより、電力供給量が飛躍的に伸びました。これに相呼応する形で戦前は電気消費量の問題から実現・量産できなかった様々な電気製品がつくられ昭和30年代前半から普及しました。なかでもテレビ・洗濯機・冷蔵庫は三種の神器と呼ばれ、文化生活の象徴ともなりました。写真は昭和30年代前半の電気炊飯器です。

▲商店街の発展

高度経済成長により商店街は大発展しました。有力な商店街ではアーケードをつくる所もでてきました。当時、北口美観街とよばれた中野のサンモールはそれらの中でも初期のもので、写真はその落成記念の時のものです。

▲ダッコチャン全国的大流行

生活に余裕がでてきて娯楽が全国的な話題や流行になったのも戦後のことです。中でも玩具のダッコチャンは空気でふくらませた、腕や柱にちょんとつけられる人形で、全国的に大流行しました。

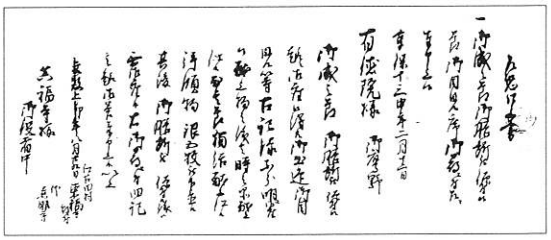
古文書つづり

八代将軍吉宗と中野

八代将軍徳川吉宗は、目安箱や小石川に養生所を設置し、享保改革を推進した人物として知られています。また、しばしば時代劇にも扱われており、私たちにとって親近感が持てる歴史上の人物の一人といえるでしょう。

右の史料によると、享保十三年（1728）の鷹狩に際して、東福寺が御膳所となっていることがわかります。八代将軍吉宗は鷹狩の際に、江古田村の東福寺で休息と食事をとったことがうかがえます。また、同史料によると、独活（＝うど）を献上し、拝領物として銀五枚を受け取っていることがわかります。史料中に「有徳院様」と呼ばれるのが八代将軍吉宗のことを指します。「有徳院様」の文言が前文に詰めずに、次の行の頭に記載されています。それは、将軍である「有徳院」に敬意を示していることを文章の中で表現しているからです。

右の史料は、文政二年（1819）の書上なので、当時の史料ではありません。しかし、この享保十三年の将軍吉宗の鷹狩については、『徳川実紀』にも享保十三年の二月の項に「十二日中野ほとりに御狩あり。御みづから鴻雁などかり得たまふ。」と記載されており、他の史料からも確認することができます。



一　乍恐口上書
御成之節御膳所被仰付候
節御目見席御尋ニ付左ニ
奉申上候
享保十三申年二月十二日
有徳院様　御鷹野
御成之節　御膳所被　仰付候
趣ニ御座候得共御出迎御目
見等古記録不分明ニ御座
候、献上物之儀者時之品献上
仕候、尤其節独活献上仕候
拝領物　銀五枚被下置候
其後　御膳所被　仰付候儀ハ
無御座候、右御尋ニ付旧記
之趣御答奉申上候、以上
文政二卯年八月廿九日　江古田　東福寺
代　煩ニ付
慈眼寺
真福寺様
御役者中

東福寺には、八代将軍吉宗が休息した場所とされる「御成りの間」がありました。しかし、建物が古くなったため、残念ながら昭和四十二年（1967）に取り壊されてしまいました。現在では、「徳川将軍御膳所跡」という石碑で当時を知ることができます。

中野は、江戸と吉宗の新田開発政策の対象となった武蔵野新田の中間に位置しています。そのため、将軍家の御鷹場を始めとして、桃を植え、人々の行楽地にしたとされる桃園や、ベトナムからの渡来象を管理した象小屋など、八代将軍吉宗にゆかりの深い場所がたくさんあります。それらは、文化財表示板や地名により、その事跡を今も知ることができます。

江戸の近郊地として中野は、八代将軍吉宗と深い関わりがあったのです。

▲昭和初年の東福寺

現在の東福寺▶

事業報告

各種事業経過

1995年1月～3月

事業名	内容	期間
企画展	「お正月展」 「第6回　おひなさま展」	12/15～1/14 2/4～3/18
ミニ展	「文化財防火デー展」	1/8～1/29
体験学習	「拓本講座」　講師 比田井克仁（館学芸員）	3/11・12
文化財調査	区内寺院文化財調査	継続中
埋蔵文化財調査	御嶽遺跡　資料整理 片山遺跡　発掘調査 江原二丁目民有地試掘調査	継続中 継続中 2/21～

寄贈資料一覧

1994年6月28日～9月21日
敬称略・受入順

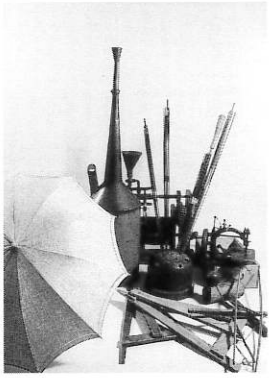
資料名	点数	氏名
アイロン	1	関東バス㈱
暖簾	1	小暮　欽作
衣生活関係資料	25	吉原　恭蔵
鉄かぶと・人形　他	21	高橋鉄五郎
食い初めの膳	1	藤本　夏子
軽石	1	潮田　文治
戦争関係資料	8	宮　博
釜	1	岸　銀太郎
選挙活動に関する資料他	133	宍戸　幸栄
洋傘製造用具	一式	後藤志津子
国民貯蓄組合規約　他	2	高橋　つね
柱時計	1	福蔵院
弁当箱・果物箱	2	笹川　克己
羽子板	2	東　一恵
地図　他	6	露無　健治
裁縫箱・鏡台　他	186	伊藤　寿郎
弁当箱	1	藤本　夏子
海軍省の記念品　他	3	大内　来三
蛟張・トランク　他	8	露無　健治
下駄・蒸器　他	4	下芝　悟
ひな人形道具・羽子板	2	加藤　令樹
五月人形一式・書籍	25	杉浦ひろ子
寄木細工・こけし	多数	高木千鶴子
学童疎開関係資料	58	瀬尾　昌邦
重箱・水枕　他	3	金沢　大作

◎貴重な資料をありがとうございました。厚くお礼申し上げます。

NEWS

次回企画展は、今年で5回目を迎える「新収蔵資料展」です。農耕具や洋傘製造道具、江戸時代後期の伊万里焼など多数展示いたします。

期間：4月20日㈭～5月20日㈯



▲伊万里焼
（江戸時代後期）

◀洋傘製造道具

入館状況

1994年12月～1995年2月　（延69日間）　（人）

一般	社教団体	学校教育	合計
7,877	333	1,404	9,614

発行年月日　1995年4月1日
編集・発行　山崎記念 中野区立歴史民俗資料館
〒165 東京都中野区江古田4－3－4
☎ 03(3319)9221　FAX 03(3319)9119
（印刷物登録番号　6中教社第21号）